

六ヶ所と福島 苦悩重ね描く



「六ヶ所の皆さん、恵ちやんを覚えていますか？」。上映会のチラシにこんな言

「核」と暮らし 写真家・島田さん記録映画

核燃料サイクル施設の立地に揺れる六ヶ所村を撮り続けてきた写真家の島田恵さん(54)が東京都で初監督を務めたドキュメンタリー映画「福島 六ヶ所 未来への伝言」が10日、六ヶ所村で初上映される。島田さんは、六ヶ所村と福島県で苦悩する人を生み出したのは「わたしたち一人ひとりの責任」と訴える。

きょう村内初上映

「責任、都会住民にも」

葉が添えられている。島田さんは、旧ソ連で生まれた1986年、六ヶ所村を初めて訪れた。核燃施設の受け入れを巡り、住民と事業者がならみ合う現実を前に、90年から12年間、村に移り住んで反対運動や村の日常を写真に収めた。

チラシに使われた福島県に住む家族の写真は六ヶ所村の映画プロジェクト提供



「核燃政策に対する賛否以上に、現実を伝えたかった」と語る島田恵さん(六ヶ所村)

核燃施設が相次いで造られる中で、どれだけの人か悩み、抵抗し、苦しんできたかを映像で記録に残したいと県内で撮影を始めた1カ月後、東日本大震災が発生。福島で原発が爆発した。「原発社会の『入り口』と『出口』とも言える二つの地域を結んで描こうと思った」。原発についての知識や技術、資金はなく、すべて一から始めた。映画では、福島から東京都に移り住んだ家族や、福島で稲作を続ける男性などが原発がもたらした悲惨な

現実を伝える。一方、「安全神話」の崩壊で六ヶ所では、ある住民が施設の安全に不安を抱き、またある住民はそれでも地域にもたらした経済的な恩恵を口にす。そういった現実の複雑さを浮き彫りにする。

しかし、島田さんは、こうした問題は「地域だけの問題ではない」と言う。「外から見ると、六ヶ所の問題は『お金ほしさに選択したこと』と突き放されがちだが、そもそもは核燃政策のシステムがもたらしたもの。そのシステムは、都会に住むわたしたちも関わり、責任がある」。六ヶ所村に住んで都会を眺めた当時、その思いを強くした。

映画は、今年2月から全国100カ所以上で上映してきた。10日は六ヶ所村泊町内会事務所2階で、午後1時半からと午後4時から2回上映する。入場料は無料。上映後、島田さんが映画に込めた思いを語る。

(小川直樹)